としょぶらり
米子高専図書館報

ISSN 1344－5634

第 98 号

平成２７年２月３日　発行
米子工業高等専門学校図書館

国際交流と図書館

校長　齊藤 正美

平成２６年１１月に挙行された米子高専創立５０周年記念式典・講演会も、未来に向けた新しい米子高専の一歩が始まります。記念事業は多くの企業、団体、個人のご寄付により成り立っていますが、その中のひとつに国際交流基金の設立があります。本校は、この基金設立と昨年度に為された韓国南ソウル大学校との交流協定の締結を期して国際交流の本格的な活動を始めます。

国際交流は、言うまでもなく、個人、学校、地域、国のレベルで内容が異なりますが、基本的には人間の交流と文化交流が核であり、その基盤の上に経済交流、学術交流などがあります。まずはお互いを知り、理解し合うことが大切ということです。これまで私たち日本人は外国の方と話をしたり、意見を述べ合ったりすることが苦手であった、いや今でも苦手であると言われています。我々日本人が他国の言語を習得しにくい環境にいることもひとつの要因ですが、彼らの文化や宗教、生活習慣、価値観等をよく知らないことも大きな理由であろうと思います。コミュニケーションとは、まず相手の言うことを聞き、理解することから始まります。そして、それに先だって自己や日本のことを理解し、語ることができることが大切です。自分の国や外国の文化・宗教・価値観などを深く理解するためには、日常的な読書や新聞閲覧が最も効果的です。ホットな話題はインターネットから集めることもできますが、きちんとした体系だった知識や情報を得るためには本や文献を読むことが一番です。国際的に活躍できる技術者や研究者をめざす学生の皆さんには是非実行してほしい事柄です。そのためにも新装成った図書館情報センターを大いに利用してください。

目　次

国際交流と図書館 ……1

2014年度　第1回米子高専海外研修旅行を終えて ……2

〈２０１４年度　校内読書感想文コンクール優秀作品発表〉

最優秀賞　電子制御工学科　1年　髙津 こなつ　「凍りのくじら」を読んで ……4

優 秀 賞　建築学科　1年　岡田　仁子　「水の柩」を読んで ……5

優 秀 賞　建築学科　1年　谷口　清美　「五体不満足」を読んで ……5

2014年度　校内読書感想文コンクールを終えて ……7

2014年度　校内読書感想文コンクール表彰者について（記念撮影、審査結果、本の題名及び著者） ……9

新着図書一覧 ……10

2014年度　校内読書感想文コンクールの概要と総評 ……12

リニューアルした図書館をテーマにした卒業設計 ……12

2014年度米子高専文化セミナー報告 ……12

2014年度　第1回米子高専海外研修旅行（韓国）を終えて

目　的	政治、経済、文化、そして産業など、あらゆる分野で“グローバル化”が加速する中、「国際理解教育」、更に「グローバル人材教育」と位置づけ、学生の「国際性の涵養」を目的とする。
内　容	南ソウル大学校（天安市）との国際交流協定に基づく学生交流を中心として、交流事業、企業見学、歴史・文化施設研修等を内容とした韓国文化体験研修である。
参加数	（1）助成対象者3人（高校生年代） ※他に大学生年代13人参加 （2）引率者7人

熊谷館長：第１回米子高専海外研修旅行の座談会を始めたいと思います。専攻科生産システム工学専攻２年遠藤君、電気情報工学科５年國谷君、建築学科４年塩見さん、物質工学科３年生田さんと司会の建築学科５年で図書館学生委員会副委員長の田中君よろしくお願いします。

田中：まずみなさんはどうしてこれに参加しようと思いましたか。

國谷涼 君

國谷：海外に興味があって、この研修旅行までは海外に行ったことがなかったので行ってみたいなと思って、参加しました。

遠藤：私は、去年別の海外交流事業に行ったのですが、英語中心でなかなかコミュニケーションが取れず、苦労しました。今回、語学力に自信がなくても海外の学生と深く交流を深める事業と聞いていたので、ぜひ参加したいと思い参加しました。

生田：私は一言でいうと「韓国が好き」なので、それで参加したいと思いました。

塩見：私は小さいころから海外が好きで、留学とかホームステイとかを探している最中にお話を聞いたので迷わず決めました。

田中：次に、向こうでの思い出を語っていただこうと思います。

遠藤：私の１番の思い出は、最終日にあった現地の学生とのフィールドワークです。日程で決まっている以外のご飯屋さんで、現地でもとても評価の良いトッポギを食べたんです。もともと辛いものが苦手ですが、これは完食してしまうほどとても美味しかった。

生田麻衣夢 さん

塩見：韓国が好きなので趣味で身につけた韓国語をどこまで話せるかなっていうのもあって、日本語学科の学生以外と夕食会で話す機会があり、まったく日本語が話せない学生とも、韓国語で話すことができたのですごくよかったです。

塩見美沙紀 さん

遠藤：ハングル教えてもらったとき楽しかったよね？

國谷：ハングル教えてもらったんですけど、成り立ちとか「こんな感じで覚えればいいんだよ」とか、安先生に分かりやすく教えてもらって、韓国の学生にマンツーマンでついて、教えてもらいました。

田中：向こうでどんなことしました？

塩見：韓国の民俗村で時代劇の撮影場所にも使われている所へ行って、次に、サムスンイノベーションミュージアム（SIM）へ行って…

遠藤：ほんとに、規模がすごいですよ。
松下幸之助歴史館のような（SIM）。電気のミュージアムでしたが、電気の成り立ちから近代の製品までを視覚的にもわかりやすく伝える工夫がされていて、勉強になりました。

田中：食文化に関しては、いかがですか？

遠藤：韓国料理はだしがきいておらず、日本食と比べて物足りなかったです。でも韓国のりは美味しかったですね。（笑）

國谷：あ～おいしかったですね。あと、かき氷がおいしかった。日本のとは違うんですよ。ジャリジャリじゃなくて、ふぁっふぁっなんですよ。（笑）

遠藤：根本的に違って、ミルクのようにクリーミーで本当に食感はとてもふんわりとしていました。

田中：ぜひとも食べてみたいですね。

國谷、遠藤：いやーあれは食べるべきですよ。

遠藤駿 君

田中：下級生や学生に何かメッセージありますか。

國谷：実際に現地に行って韓国っておもしろい国だなっていうふうに思ったので、日本人で韓国にいいイメージを持っていない方もいると思うんですけど、その固定概念を捨ててほしいなと思います。現地に行って実際に感じてほしいです。

田中：そうですよね、僕も今話を聞いた韓国のイメージと聞く前の韓国のイメージはだいぶ変わって親近感が湧いていますし実際に行くって影響力があるっていう感じですね。

遠藤：国際交流ってお堅い感じがしますが韓国の学生たちは日本語が上手ですし、絶対に行ったら楽しいです。だから、行くだけでもたくさん得るものがあるので低学年の海外に興味のある子も参加してもらえるといいなと思います。

生田：もともと私は韓国が好きなので行くことを決めたのですが、私はそんなに韓国語を知ってるわけではありません。しかし、韓国の人たちは一生懸命日本語で伝えようとしてくれるし、それがすごく暖かくて嬉しかったです。だからやっぱり韓国が好きな人も嫌いな人も一度韓国人と交流してみて、韓国人は日本人の事が好きだ、というのを感じてほしいですね。

司会 田中優哉 君

塩見：韓国に行く学生の人とも全員初めましてだったんですけど、三泊四日で米子高専の学生とも仲良くなれたし、韓国の学生とも仲良くなれたので本当に濃かったんですよね。日本にいては、外国人の方と触れ合う機会ってほとんどないと思うんで、ジェスチャーとかでなんとかなるので海外に行ってみて経験してもらいたいです。あと来年も行きたいので来年も行かしてください。（笑）

田中：それぞれの意見がありましたが時間も来ましたのでこれで終わりにしたいと思います。本日はこの座談会に参加いただきありがとうございました。

（平成 26 年 11 月 5 日　図書館ゼミナール室於
録音再生、写真撮影協力は、
建築学科５年　青山萌、岩本直樹、小泉友希）

最優秀賞

「凍りのくじら」を読んで

電子制御工学科　1年　髙津こなつ

中学一年の時に友達にされた相談で、今だにはっきりと内容を憶えているものがある。それは「友達と話している時、ふとした瞬間に全部がばかばかしく思える時がある。そしてそんな時、自分の居場所はどこなのだろうと思う。」という内容の相談だった。『凍りのくじら』はそんな思春期の不安定な気持ちをそのまま書いた作品だと私は思った。

この話は写真家であった父を継ぎ、同じく写真家となった芦沢理帆子の高校時代の回想の話だ。理帆子は「ドラえもん」の作者である、藤子 F 不二雄を敬愛している。その藤子 F 先生が自分の作品の事を「SF すなわちサイエンスフィクションではなく、少し不思議の SF」と呼んだ事に倣って、彼女は自分や周囲の個性をスコシナントカとラベルづけする。それがこの物語の肝だ。

そんな理帆子は自身のことを「すこし不在」だという。理由は、「物事の当事者になれず自分の居場所をそこだと思えないから」らしい。まるで先に述べた私の友人のようだ。そして、私もそんな時がある。他にも思春期にこのような、謎の孤独感を感じる人は多くいるのではないかと思う。そんなありふれた悩みを自分だけの特別な個性だと思い込んでいる理帆子は、まるで自分から孤独になろうとしているようで、まだ子供なのだなと思った。

ドラえもんの藤子 F 先生、理帆子にくわえて、物語のキーである人物がいる。理帆子を写真に撮らせてくれと頼んできた、芦沢光だ。実はこの芦沢は理帆子の亡くなった父の高校生時代の姿、いわば亡霊のようなものだった。これが作者の設けた『凍りのくじら』の最大のしかけで、私もこれには驚いた。芦沢は最後に自分が父であることを理帆子に気付かせるのだが、その後消える直前、「テキオー灯」の光を理帆子にあて、こんな台詞を口にする。「どんな場所であっても、この光を浴びたら生きていける。息苦しさを感じることなく、そこを自分の場所として捉え、呼吸ができるよ。（中略）君はもう、少し不在なんかじゃなくなる」まず、「テキオー灯」とは、アニメドラえもんに出てくる秘密道具で、この光を浴びれば水中でも呼吸ができ、暗い所も明るく見える、まさに「そこを自分の場所として捉えられる」道具だ。きっと芦沢は、こうすることで、理帆子を孤独から救いたくて亡霊にまでなったのではないかと思う。実際理帆子はこのことで自分の居場所はたくさんある事に気づき、先程述べたような子供の考えを捨てて大人になることができた。我が子が子供から大人になるのを若くして死し、見届けられなかった父の、「愛の執念」のような物を感じ胸が熱くなった。

私はこの作品がきっかけで、作者である辻村深月の本を一通り読んだ。そしてその中の「名前探しの放課後」という作品で、理帆子に再会した。その作品では大人の、写真家として働き、知人の子供達を暖かく見守る理帆子がえがかれていた。私はその様子を読んで新しい理帆子の個性は「すごく father」だと思った。子供達を暖かく見守る彼女のそれは、彼女の父とよく似ていると思ったのだ。そして私は考えた。今の私をスコシナントカにあてはめるとすれば何だろう。そして、この後それをどう変えていきたいだろうか、と。今の私は「少し不実」だと思う。自分に自信がなくて、誰に対しても本当の自分を見せられていない気がするからだ。偽物の自分でいれば、たとえそれが傷ついても偽物だと割り切れる。しかし、これから先社会に出ていく上で、それではいけないと思っている。信頼には信頼が返ってくる。私が不実なままではこれから会う取引相手や友人も不実な姿しか見せられないだろう。だから私は、少しずつ変わっていく必要がある。そして変わっていく上で「すごく不屈」になりたい。何事にも負けず、よりよい方向を追求していきたい。

これから先たくさんの事が私を待っているだろう。環境も何度も変わり、不屈を目指すのをやめたくなったり、時にはまた、「私の居場所はここではない」と思うこともあるかもしれない。しかしそんな時は、もう一度『凍りのくじら』を読み思い出したい。理帆子

に芦沢がいたように、私にも家族がいること。そして芦沢が理帆子を「テキオー灯」で照らしたように、居場所があることを教えてくれる友達がいること。

私たちの世界にはまだ、ドラえもんの魔法道具はない。でも、それがなくても、代わりに助け合い支え合えるような仲間がいることを、私は忘れたくないし、皆にもおぼえていて欲しいと思う。

優秀賞

「水の柩」を読んで

建築学科　1年　岡田　仁子

私はこの物語を読み、「大切な物に失ってから気が付く」といった類いのよく耳にするフレーズの意味を、初めて明確に感じました。人間は現在自分がいる場所の明かりを俯瞰的に見て感じ取ることが難しいから、現時点の状況を離れた、つまり失った後からその輝きに気が付くのだと思いました。

まず物語の冒頭は、登場人物たちがバスに乗っているシーンから開始されています。それから主人公である逸夫の回想という形でストーリーが展開されていく中でバスに乗っている人々の関係性やバスの行き先、そして最終的に何故このメンバーでそこへ向かっているのかが明らかになります。そしてすべての回想が終了すると視点が現在に戻り、この話の結末へ至ります。まるで糸を解いているようなこの構成に、本の著者である道尾秀介が元々ミステリ作家だったことの名残が見てとれました。話を読み進めていると、自分をごく普通だと思っていて、その普通で平凡であることを嫌っていた逸夫が、クラスメイトの敦子や祖母のいくとの関りの中で過去になかった、則ち逸夫にとって普通ではない経験をする中で今までの生活に戻りたいと思うようになっていく様子が描かれています。始め逸夫は特に何もないつまらない自分と好きな人ができた同級生の智樹とを比較して、智樹のことをうらやましく思います。私はこの場面にひどく既視感を覚えました。それは私自身が逸夫と同じような感情を抱いていたことがあるからです。毎日が同じように思えて、周囲の友達が笑ったり泣いたりと忙しそうに過ごしているのがうらやましかった中学生の頃の私。卒業すらもマンネリからの脱出だと言い嬉しがっていました。逸夫が敦子の誘いで手紙を掘り返し書き変えるため親に嘘を吐き夜の学校に忍び込むという非日常的な計画に、とまどいつつも心を踊らせていることにとても共感しました。その後逸夫はそれまでの日常が壊れるにつれ、普通だった少し前の自分の状態を求めます。ここで私は昔の自分のみでなく今の自分も逸夫と似ていることに気が付きました。高専に入学し、家から出て寮生になりすべての環境が一変してから、色褪せた退屈な日々だと思っていた中学校生活が懐かしいと感じるようになっていました。自分は当時気付いていなかった光を今更実感しているのだと知りました。逸夫と同じように主観から一歩離れたことで自分が見えたのです。しかし逸夫と私には大きな違いがあります。逸夫はそういった追憶から現在の自身を見つめてはっきりとした目標を持ち先を見据えます。しかし私はそれができていません。

『水の柩』を読んだことにより、私は自分を見直すきっかけができました。私も逸夫のように、単に懐古に囚われるのではなく、そのような思いも自らの糧として先に進んでいかなければならないと強く感じました。

優秀賞

「五体不満足」を読んで

建築学科　1年　谷口　清美

この本は、乙武さんが産まれるところから始まります。産まれた時、手と足がないことを誰も知らなかったため、驚いた病院は、母親へのショックが大きすぎるということから一ヶ月間会えなかったそうです。そして一ヶ月後の対面の日、乙武さんのお母さんの口から出た言葉は、その場に居た誰もが思いもしてなかった言葉でした。「かわいい」それだけでした。その喜びの感情を抱いたお母さんがいたから、乙武さんの人生は始まったのだと思いました。

その後、スクスクと育っていった乙武さんは小学校

へ通う年になりました。小学校側はなかなか「入学許可」を取ってくれなかったそうです。でも、乙武さんが自分にはこういうことができるのだ、と字を書く、ものを食べる、紙を切る、自分で歩くなど色々なことをやって示したことで認めてもらえることができました。こうして、普通教育の公立学校に通い、ここでの出会いが乙武さんの今をつくっているのだと思います。まず、先生との出会いでした。高木先生という先生と岡先生という先生です。乙武さんは、この２人の担任の先生のおかげで今の生活があると言われていました。まず、高木先生は車椅子の使用を禁止しました。「かわいそうだ」と思うのは当然ですが、高木先生は「いつかひとりで生きていかないといけないときがくる。今、何をするのが本当に必要なのかを考えていかないといけない」という信念から決断したそうです。このことがあったから、自力での移動が可能になったそうです。次に岡先生は、乙武さんは、乙武さんができることをという考え方で、ワープロを使ってプリントや提示物などを作らせました。ここから、「できること」と「できないこと」をしっかり区別させることを学ばせました。このような先生達がいたから今の乙武さんの原点になっているのだと思います。

乙武さんはこの本から色々なことを私に教えてくださいました。まずは、恋愛に障害は関係ない、というところで、「障害を言い訳にしないこと」というところです。乙武さんは、どうせ～だから…なんて思っていては恋のバリアになってしまってたぐり寄せられる恋も自分から追い返してしまっていると言われました。それは自分達にも合てはまるし、最初からあきらめていたら何も変わらないので、前向きに考えていこうと思えました。次に、「人間は一人一人でこの世界が構成されており、お互い違いや持ち味があって、ひとりひとりが価値のある大切な「生命」」というところです。ここから、私は、この世界に要らないものではないのだと思えることができました。そして、自分は自分にしかできないことを見つけていこうと思いました。最後に、「みんなが違うのはあたりまえ。自分の存在を認められるようになれば、自然に目の前にいる相手の相手らしさを認めることができる」というところです。自分の役割を見つけ、自分にしかできないことを見つけて自分を認めていけるようになりたいと思い、「どうせ自分なんて」なんて言葉は二度と言わないようになりたいと思いました。

私はこの夏にも新しいことを学びました。この夏、地元でバイトをしました。その時、二人の障害者の方に出会いました。進物用の梨を道の駅へ売りに出ていた時のことでした。まず一人目は、大学生くらいの男の人でした。その人は腕が肘くらいまでの長さしかありませんでした。その人のまわりには男の人二人と女の人二人がいました。なぜか目が離せなくなってしまい、見ていると、楽しそうに喋り出したり、写真を撮ったりしました。その姿を見て、すごくいいなと思いました。その人をかこみ、この偽りのない友情が本当の姿なんだなと素直に感じました。そして、私もこんな偽りのない、心の底から大好きだといえる関係を築きたいなと思いました。次に二人目は、バイトのお客さんの男性でした。その人は足がなく、車椅子でした。その人はすごく明るくて、一緒に喋っているとこっちが元気をもらえるほどでした。そのお客さんは、車椅子で走る大会のために県外からわざわざ来ていました。それも今年に限らず前からずっと来ているそうです。自分にできることを一生懸命やっているその姿は生き生きとしていて、周りに勇気を与えていました。私もこんな人になりたい、周りに元気や勇気を与えられる人になりたいと思いました。そして、このお客さんのおかげで、自分も頑張っていこうと思うことができました。

この本を読んで、自分で体験して、障害者の方も日常生活の中で日々を一生懸命生きていることが分かりました。「障害があるから何」というわけではなく、それぞれが「一人一人同じ人間」なのだということも分かりました。自分は日々を一生懸命に過ごしているのかと改めて考えることもできたし、これからの生活の仕方や世界の見方が変わっていくと感じました。本当に、この本を読めてよかった、体験できてよかったと心から思っています。

2014年度　校内読書感想文コンクールを終えて

熊谷館長:校内読書感想文コンクール最優秀賞受賞、電子制御工学科1年髙津さんと優秀賞受賞、建築学科1年の岡田さん、谷口さんおめでとうございます。今までに読書感想文コンクールに応募された経験はありますか。

岡田：読書感想文コンクールは中２の夏休みの自由課題で読書感想文を書いて、県の大会で入賞しました。中３の時も、先生にもう一回書いてほしいとたのまれて「二十四の瞳」を書きました。周りの大人から好評でした。それ以来の読書感想文だと思いますが、「水の柩」について書きました。

谷口：私は小学校から中学校まで書いたことがありません。

髙津：私も読書感想文は初めて書いたんですけど、本の文献を選ぶ時、最初は芥川龍之介の「さるかに合戦」の方が読書感想文とか感想を書くには向いているかなと思ったんですけど、やっぱりどうしても自分が好きな作品で書きたかったので、自分の好きな作家の特に好きな作品「凍りのくじら」について書かせてもらいました。

髙津こなつ さん

熊谷館長：本を選んだ理由をお尋ねします。

岡田：今回「水の柩」を選んだのは、作家の道尾秀介先生の本を小６ぐらいから読んで集めていて、夏休みにこの人の本を読みたいと思って、たまたま書店にいったところ、表紙に惹かれたからです。「水の柩」というタイトルと、水の感じで透き通ったような写真の奥にうっすらと街の写真が浮かんでいて、それに惹かれました。

谷口：かつて、乙武さんが地元の八頭町で講演をされたことがあって、興味をもっていました。今回が読書感想文は初めてだったので何を読もうかなとか思ったんですけど、人権作文を中1から中３まで毎年書いていて、人権についてとか障害者についての本を読んでみたいなと思っていたので、「五体不満足」を選びました。

髙津：一番の理由は、作者の辻村さんがすごく好きだからです。辻村さんは心理描写がすごくリアルな作家さんで、「凍りのくじら」っていう本は思春期のちょうど高校２年生とか３年生とかの主人公の心理描写が特にリアルで、自分の年齢にも合うなって思ったので選びました。

熊谷館長：本を読んでどのように思いましたか。

岡田：「水の柩」はもともと中学生の主人公が自分は普通だと思っていて、それがどんどん環境が変わって他の人と接触していくうちに、大人になっていってというのが書かれているんですけど、私はどちらかというとまだ当分の間子供でいいと思っていたんですけど、その主人公の姿を見ていると、何か自分で考えて明確な目標を持って大人になろうと突き進んでいく姿がなんかこう…、器用な主人公ではないんですけどその姿が格好いいと思い自分も子供のままではなくて、大人になろうと努力したいと思いました。

谷口：私は中学校の時はバスケをやっていたのです

谷口清美 さん

岡田仁子 さん

が、高専でバレーを始めて、全く初めての経験で何も出来なくて、全然前に進めてないなとか体格もセンスも恵まれてないから私はバレーは向いていないんだなとか思ってました。でも、「五体不満足」を読んで障害を言い訳にしないことと書かれていて、体格やセンスを言い訳にせず努力したらその分はついてくるのだと思うことができ、もっと頑張ろうと思いました。

髙津：私は中学時代は人の目を気にしすぎて不安だったんです。しかし、今では、自分の居場所って、周りが常に場所としてあって、そこに自分があわせて行くと考えるのじゃなくて、自分がしっかりアイデンティティを持っていると、それにあわせて環境の方がかわっていくと思ってます。そして自信を持つには、自分が好きな事とか、人より得意だなと思えることがあることが大切だと思うし、とにかく好きな事に没頭していくうちにそれが自分らしさになっていくと思っています。そこの過程がまた、自信になってきます。

熊谷館長：皆さんにとって本を読んだり、読書感想文を書いたりするってどんなことだと思いますか。

髙津：読書感想文を書くこと自体は全然苦痛じゃなくて、文章を考えたりするのは好きです。ただ、賞とかあったら良いものをつくりたいという邪念が働くので、そうなるとしんどいです。

今回書いて、賞をいただきありがたく思っています。読んでいただいた人に少しでも自分の考えた文章とか考え方とか思ったことが認めてもらえることが、少し自信になったので、今回は書いてみて良かったと思います。

また、本を読むと人生楽しくなると思うので、あまり読書が得意でない人にも、別にそこに特別深い意味とか見出さなくてもとりあえず読んでみたら、なんか変わるかもなぐらいでいろんな本を読んでほしいですし、自分も本を読んでいきたいです。

岡田：今回一番大きく違ったのは今までの夏休みの読書感想文は自由制作として読書感想文を選んで提出していたので、読んで感想をもったからじゃあこれを書こうって書いたものでした。今まではリアリティとかを求めていなかったのですが、自分で感想を持って書こうと思って改めて読んでみると自分と重ねて読むということが多くなっていたので、それは小さな体験で本当はもうちょっと時間をかけて書いたほうが良かったと思います。

また、本を自分1人で読んで何か思っても、思っただけで終わったら、私の場合なんですけど、自分でどうしようと思って、すごくイライラしてしまうので、本を読む機会があったら、周りとできるだけ共有して、貸し合うでは無いんですけどどうせ本を読むなら周りとシェアしていけたら良いと思います。

谷口：私は結構人見知りで中学校の時とかもあんまり人と話せなくて、人と会うのが嫌だったんですけどこの本を読んで、人に出会う事はすごく大切だと思いました。人に出会って話してみるだけで、自分と違う世界や考えが見えたりするから、人とコミュニケーションをとったり新しい人と出会う事は、すごくすばらしいことなのだと思いました。本を読むことで、いろんな影響を受けることができるので、どんどん本を読んでいきたいし、本を読んで影響を受けたことで自分が変わるきっかけにもなると思うから、それを周りの人にも伝えて自分だけでなく、周りの人も変えていけたらしたいなと思います。

（平成 26 年 11 月 18 日　図書館ゼミナール室於
録音再生、写真撮影協力は、専攻科建築学専攻２年
吉田千紘、建築学科５年　岩本直樹）

表彰式記念撮影（校長室）

審査結果

賞	学科·学年·氏名			作品名
最優秀賞	D	1	髙津 こなつ	「凍りのくじら」を読んで
優 秀 賞	A	1	岡田　仁子	「水の柩」を読んで
〃	A	1	谷口　清美	「五体不満足」を読んで
佳　作	M	1	澤丸　陽佳	「きみの友だち」を読んで
〃	E	1	飯田　涼太	会社のあるべき姿
〃	E	1	川本　拓実	気楽に生きる方法を探して
〃	C	1	熊本　千夏	すすみ、あゆむ。生きる。
〃	C	1	前田 結希乃	LIFE
〃	A	1	川崎　綾華	「世界から猫が消えたなら」を読んで
〃	A	2	似内　瑞季	「できなくなる前に」

本の題名及び著者（平成26年度読書感想文2次審査分より）

本の題名	著者等
杜子春	芥川龍之介
桐島、部活やめるってよ	朝井リョウ
野球部ひとり	朝倉　宏景
博士の愛した数式	小川　洋子
五体不満足	乙武　洋匡
魔女の宅急便	角野　栄子
ボクが医者になるなんて	川渕　圭一
世界から猫が消えたなら	川村　元気
あなたの余命教えます	幸田　真音
宇宙は無数にあるのか	佐藤　勝彦
citrus	サブロウタ
きみの友だち	重松　清
天国はまだ遠く	瀬尾まいこ
人を動かす高校野球監督の名言	田尻　賢誉
凍りのくじら	辻村　深月

本の題名	著者等
ぼくのメジャースプーン	辻村　深月
ツナグ	辻村　深月
心を整える	長谷部　誠
120％心地よい自分で生きる方法	秦　由佳
永遠の０（ゼロ）	百田　尚樹
海賊とよばれた男	百田　尚樹
水の柩	道尾　秀介
セロ弾きのゴーシュ	宮沢　賢治
カラフル	森　絵都
四畳半神話大系	森見登美彦
名のないシシャ	山田　悠介
出口のない海	横山　秀夫
星の王子さま	サンテグジュペリ、池澤夏樹（訳）
たったひとつの冴えたやり方	ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア、浅倉久志（訳）

米子工業高等専門学校図書館
新着図書一覧（平成27年1月～3月頃入荷）

No	本の題名	著者等
1	破門	黒川 博行
2	恋歌	朝井 まかて
3	昭和の犬 Perspective kid	姫野 カオルコ
4	ホテルローヤル	桜木 紫乃
5	何者	朝井 リョウ
6	等伯 上	安部 龍太郎
7	等伯 下	安部 龍太郎
8	鍵のない夢を見る	辻村 深月
9	蜩ノ記	葉室 麟
10	漂砂のうたう	木内 昇
11	月と蟹	道尾 秀介
12	小さいおうち	中島 京子
13	廃墟に乞う	佐々木 譲
14	ほかならぬ人へ	白石 一文
15	鷺と雪	北村 薫
16	切羽へ	井上 荒野
17	花まんま	朱川 湊人
18	邂逅の森	熊谷 達也
19	星々の舟	村山 由佳
20	生きる	乙川 優三郎
21	あかね空	山本 一力
22	春の庭	柴崎 友香
23	穴	小山田 浩子
24	爪と目	藤野 可織
25	abさんご	黒田 夏子
26	冥土めぐり	鹿島田 真希
27	道化師の蝶	円城 塔
28	苦役列車	西村 賢太
29	乙女の密告	赤染 晶子
30	ポトスライムの舟	津村 記久子
31	ひとり日和	青山 七恵
32	沖で待つ	絲山 秋子
33	昨夜のカレー、明日のパン	木皿 泉
34	さようなら、オレンジ	岩城 けい
35	とっぴんぱらりの風太郎	万城目 学
36	教場	長岡 弘樹
37	ランチのアッコちゃん	柚木 麻子
38	想像ラジオ	いとう せいこう
39	聖なる怠け者の冒険	森見 登美彦
40	去年の冬、きみと別れ	中村 文則
41	64	横山 秀夫
42	楽園のカンヴァス	原田 マハ
43	きみはいい子	中脇 初枝
44	ふくわらい	西 加奈子
45	晴天の迷いクジラ	窪 美澄
46	ソロモンの偽証 第1部 事件	宮部 みゆき
47	ソロモンの偽証 第2部 決意	宮部 みゆき
48	ソロモンの偽証 第3部 法廷	宮部 みゆき
49	世界から猫が消えたなら	川村 元気
50	百年法 上	山田 宗樹
51	百年法 下	山田 宗樹
52	屍者の帝国	伊藤 計劃、円城 塔
53	光圀伝	冲方 丁
54	舟を編む	三浦 しをん
55	ジェノサイド	高野 和明
56	ピエタ	大島 真寿美
57	くちびるに歌を	中田 永一
58	ユリゴコロ	沼田 まほかる
59	誰かが足りない	宮下 奈都
60	プリズム	百田 尚樹
61	ペンギン・ハイウェイ	森見 登美彦
62	錨を上げよ 上	百田 尚樹
63	錨を上げよ 下	百田 尚樹
64	シューマンの指	奥泉 光
65	叫びと祈り（ミステリ・フロンティア）	梓崎 優
66	ストーリー・セラー	有川 浩
67	横道世之介	吉田 修一
68	神去なあなあ夜話	三浦 しをん
69	船に乗れ! 1 合奏と協奏	藤谷 治
70	船に乗れ! 2 独奏	藤谷 治
71	船に乗れ! 3 合奏協奏曲	藤谷 治
72	告白	湊 かなえ
73	テンペスト 上 若夏の巻	池上 永一
74	テンペスト 下 花風の巻	池上 永一
75	新世界より 上	貴志 祐介
76	新世界より 下	貴志 祐介
77	出星前夜	飯嶋 和一

No	本の題名	著者等
78	アイネクライネナハトムジーク	伊坂 幸太郎
79	ワンダフルストーリー	伊坂 幸太郎 他
80	残り全部バケーション	伊坂 幸太郎
81	キャプテンサンダーボルト	阿部 和重、伊坂 幸太郎
82	キャロリング	有川 浩
83	明日の子供たち	有川 浩
84	コロボックル絵物語	有川 浩、村上 勉（絵）
85	ヒア・カムズ・ザ・サン	有川 浩
86	三匹のおっさん	有川 浩
87	三匹のおっさん ふたたび	有川 浩
88	オレたちバブル入行組（半沢直樹シリーズ）	池井戸 潤
89	オレたち花のバブル組（半沢直樹シリーズ）	池井戸 潤
90	ロスジェネの逆襲（半沢直樹シリーズ）	池井戸 潤
91	銀翼のイカロス（半沢直樹シリーズ）	池井戸 潤
92	七つの会議	池井戸 潤
93	八朔の雪	高田 郁
94	花散らしの雨	高田 郁
95	想い雲	高田 郁
96	今朝の春	高田 郁
97	小夜しぐれ	高田 郁
98	心星ひとつ	高田 郁
99	夏天の虹	高田 郁
100	残月	高田 郁
101	美雪晴れ	高田 郁
102	天の梯	高田 郁
103	荒神	宮部 みゆき
104	ペテロの葬列	宮部 みゆき
105	桜ほうさら	宮部 みゆき
106	政と源	三浦 しをん
107	木暮荘物語	三浦 しをん
108	天国旅行	三浦 しをん
109	仏果を得ず	三浦 しをん
110	風が強く吹いている	三浦 しをん
111	家族シアター	辻村 深月
112	盲目的な恋と友情	辻村 深月
113	ツナグ	辻村 深月
114	本日は大安なり	辻村 深月
115	水底フェスタ	辻村 深月
116	色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年	村上 春樹
117	女のいない男たち	村上 春樹
118	恋しくて Ten Selected Love Stories	村上 春樹
119	虚ろな十字架	東野 圭吾
120	夢幻花	東野 圭吾
121	ナミヤ雑貨店の奇蹟	東野 圭吾
122	マスカレード・ホテル	東野 圭吾
123	東京バンドワゴン	小路 幸也
124	オール・ユー・ニード・イズ・ラブ	小路 幸也
125	花咲小路四丁目の聖人	小路 幸也
126	大きな音が聞こえるか	坂木 司
127	和菓子のアン	坂木 司
128	奇跡の人 The Miracle Worker	原田 マハ
129	太陽の棘	原田 マハ
130	本日は、お日柄もよく	原田 マハ
131	翔ぶ少女	原田 マハ
132	ヤモリ、カエル、シジミチョウ	江国 香織
133	はだかんぼうたち	江国 香織
134	ちょうちんそで	江国 香織
135	ホリー・ガーデン	江国 香織
136	鹿の王 上 生き残った者	上橋 菜穂子
137	鹿の王 下 還って行く者	上橋 菜穂子
138	ぬけまいる	朝井 まかて
139	すかたん	朝井 まかて
140	星々たち	桜木 紫乃
141	猫を拾いに	川上 弘美
142	どこから行っても遠い町	川上 弘美
143	古道具中野商店	川上 弘美
144	ニシノユキヒコの恋と冒険	川上 弘美
145	椰子・椰子	川上 弘美、山口 マオ（画）
146	ブラフマンの埋葬	小川 洋子
147	ことり	小川 洋子
148	最果てアーケード	小川 洋子
149	いつも彼らはどこかに	小川 洋子
150	スペードの3	朝井 リョウ
151	世界地図の下書き	朝井 リョウ
152	冬を待つ城	安部 龍太郎
153	火山のふもとで	松家 仁之
154	沈むフランシス	松家 仁之

No	本の題名	著者等
155	太陽の塔	森見 登美彦
156	フォルトゥナの瞳	百田 尚樹
157	夢を売る男	百田 尚樹
158	四人組がいた。	高村 薫
159	フライ,ダディ,フライ	金城 一紀
160	対話篇	金城 一紀
161	Little DJ 小さな恋の物語	鬼塚 忠
162	悟浄出立	万城目 学
163	雪月花黙示録	恩田 陸
164	夜の底は柔らかな幻 上	恩田 陸
165	夜の底は柔らかな幻 下	恩田 陸
166	私と踊って	恩田 陸
167	忘れ形見 漢方医・有安	秋山 香乃
168	メグル	乾 ルカ
169	ライフトラベラー 人生の旅人	喜多川 泰
170	One World みんなが誰かを幸せにしているこの世界	喜多川 泰
171	君と会えたから… The Goddess of Victory	喜多川 泰
172	ボクは坊さん。	白川 密成
173	田村はまだか	朝倉 かすみ
174	明日のマーチ	石田 衣良
175	シューカツ!	石田 衣良
176	シュンスケ!	門井 慶喜
177	ホテル・コンシェルジュ	門井 慶喜
178	拝啓17歳の私	蓮見 恭子
179	青い鳥	重松 清
180	きよしこ	重松 清
181	一人っ子同盟	重松 清
182	ゼツメツ少年	重松 清
183	笹の舟で海をわたる	角田 光代
184	すべて真夜中の恋人たち	川上 未映子
185	愛の夢とか	川上 未映子
186	箱庭図書館	乙一
187	ほんとうの花を見せにきた	桜庭 一樹
188	いとの森の家	東 直子
189	ウエストウイング	津村 記久子
190	サラバ! 上	西 加奈子
191	サラバ! 下	西 加奈子
192	鳥たち	よしもと ばなな
193	花のベッドでひるねして	よしもと ばなな
194	トオリヌケキンシ	加納 朋子
195	神坐す山の物語	浅田 次郎
196	おさがしの本は	門井 慶喜
197	図書館の魔女 上	高田 大介
198	図書館の魔女 下	高田 大介
199	物語のおわり	湊 かなえ
200	Nのために	湊 かなえ
201	春、戻る	瀬尾 まいこ
202	あと少し、もう少し	瀬尾 まいこ
203	ヴォイド・シェイパ	森 博嗣
204	ブラッド・スクーパ	森 博嗣
205	スカル・ブレーカ	森 博嗣
206	フォグ・ハイダ	森 博嗣
207	ターンオーバー	堂場 瞬一
208	電氣ホテル	吉田 篤弘
209	針がとぶ Goodbye porkpie hat	吉田 篤弘
210	丹生都比売 梨木香歩作品集	梨木 香歩
211	3時のアッコちゃん	柚木 麻子
212	営繕かるかや怪異譚	小野 不由美
213	フラニーとズーイ	J.D.サリンジャー、村上 春樹(訳)
214	チョコレート・アンダーグラウンド	アレックス・シアラー、金原 瑞人(訳)
215	われはロボット 決定版	アイザック・アシモフ、小尾 芙佐(訳)
216	窓から逃げた100歳老人	ヨナス・ヨナソン、柳瀬 尚紀(訳)
217	かものジョナサン 完成版	リチャード・バック
218	エル・スール	アデライダ・ガルシア=モラレス
219	ウィンブルドン	ラッセル・ブラッドン、池 央耿(訳)
220	日本人なら知っておきたい日本文学 ヤマトタケルから兼好まで、人物で読む古典	蛇蔵、海野 凪子
221	日本人の知らない日本語 4 海外編	メディアファクトリー
222	学校では教えてくれない!国語辞典の遊び方	サンキュータツオ
223	オツな日本語 日本人が大切に伝えてきた言葉と心	金田一 秀穂
224	日本語に生まれて 世界の本屋さんで考えたこと	中村 和恵
225	日本語の作文技術 新装版	本多 勝一
226	気ままに漢詩キブン	足立 幸代、三上 英司(監修)
227	林修の「今読みたい」日本文学講座	林 修
228	恋する日本語	小山 薫堂
229	手紙屋 僕の就職活動を変えた十通の手紙	喜多川 泰
230	その幸運は偶然ではないんです! 夢の仕事をつかむ心の練習問題	J.D.クランボルツ、A.S.レヴィン
231	美キャリア養成講座 自分らしく生きる!7つの実践モデル	西村 由美

No	本の題名	著者等
232	はたらきたい。ほぼ日の就職論 新装版	ほぼ日刊イトイ新聞
233	How Google Works 私たちの働き方とマネジメント	エリック・シュミット 他
234	ふむふむ おしえて、お仕事!	三浦 しをん
235	若き数学者のアメリカ	藤原 正彦
236	がんばりません	佐野 洋子
237	降り積もる光の粒	角田 光代
238	ポケットに物語を入れて	角田 光代
239	ぼくは猟師になった	千松 信也
240	学生時代にやらなくてもいい20のこと	朝井 リョウ
241	すばらしい日々	よしもと ばなな、潮 千穂(写真)
242	虫眼とアニ眼	養老 孟司、宮崎 駿
243	学ぶよろこび 創造と発見	梅原 猛
244	日本の伝統とは何か	梅原 猛
245	人類哲学へ	梅原 猛
246	わたしはマララ 教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女	マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム
247	聞く力 心をひらく35のヒント	阿川 佐和子
248	阿川佐和子の世界一受けたい授業 第一人者14人に奥義を学ぶ	阿川 佐和子
249	頭がいい人はなぜ、方眼ノートを使うのか? 図解	高橋 政史
250	池上彰の教養のススメ 東京工業大学リベラルアーツセンター篇	池上 彰
251	池上彰のやさしい教養講座	池上 彰
252	図解池上彰の経済「超」入門	池上 彰
253	高校生からわかる「資本論」(池上彰の講義の時間)	池上 彰
254	夢をかなえる。思いを実現させるための64のアプローチ	澤 穂希
255	紙つな!!!彼らが本の紙を造っている 再生・日本製紙石巻工場	佐々 涼子
256	ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと	鎌田 洋
257	ディズニーおもてなしの神様が教えてくれたこと	鎌田 洋
258	ディズニーありがとうの神様が教えてくれたこと	鎌田 洋
259	ディズニーサービスの神様が教えてくれたこと	鎌田 洋
260	空の上で本当にあった心温まる物語	三枝 理枝子
261	空の上で本当にあった心温まる物語 2	三枝 理枝子
262	ぼくらの近代建築デラックス!	万城目 学、門井 慶喜
263	物語のある広告コピー	パイインターナショナル
264	幸福を見つめるコピー	岩崎 俊一
265	高校生の夢 47都道府県47人の高校生の夢	日本ドリームプロジェクト
266	1歳から100歳の夢	日本ドリームプロジェクト
267	働く人の夢 33人のしごと、夢、きっかけ	日本ドリームプロジェクト
268	1%の力	鎌田 實
269	フランス人は10着しか服を持たない パリで学んだ"暮らしの質"を高める秘訣	ジェニファー・L・スコット、神崎 朗子(訳)
270	地球のためにわたしができること	枝廣 淳子
271	17歳のための世界と日本の見方 セイゴオ先生の人間文化講義	松岡 正剛
272	小宮一慶の 1分で読む!「日経新聞」最大活用術 2015年版	小宮 一慶
273	えんぴつの約束── 一流コンサルタントだったぼくが、世界に200の学校を建てたわけ	アダム・ブラウン、関 美和(訳)
274	伝え方が9割	佐々木 圭一
275	世界のエリートが学んできた自分の考えを「伝える力」の授業	狩野 みき
276	たいていのことは20時間で習得できる	ジョシュ・カウフマン、土方 奈美(訳)
277	100%好かれる1%の習慣 500万人のお客様から学んだ人間関係の法則	松澤 萬紀
278	ニューヨークの女性の「強く美しく」生きる方法	エリカ
279	齋藤ゼミ「才能」に気づく19の自己分析	齋藤 孝
280	人生はワンチャンス! 「仕事」も「遊び」も楽しくなる65の方法	水野 敬也、長沼 直樹
281	HUG!Friends	丹葉 暁弥(撮影)、ひすい こたろう(物語)
282	ごめん! 青色LED開発者最後の独白	中村 修二
283	大好きなことを「仕事」にしよう	中村 修二
284	負けてたまるか! 青色発光ダイオード開発者の言い分 新版	中村 修二
285	世界の図書館 美しい知の遺産	ジェームズ・W・P・キャンベル
286	読書が「知識」と「行動」に変わる本	大岩 俊之
287	読書狂の冒険は終わらない!	三上 延、倉田 英之
288	全方位読書案内 「何から読めばいいか」がわかる	齋藤 孝
289	NO BOOK NO LIFE 全国の本屋さんが選んだ僕たちに幸せをくれた307冊の本	雷鳥社、白井 匠(イラスト)
290	本の「使い方」1万冊を血肉にした方法	出口 治明
291	世界で最も美しい書店	清水 玲奈
292	ノンフィクションはこれを読め! 2014 HONZが選んだ100冊	成毛 眞
293	人生が変わる読書術 本物の知識と教養がグングン身に付く	吉田 裕子
294	ダカフェ日記	森 友治(撮影・文)
295	ダカフェ日記 続	森 友治(撮影・文)
296	ダカフェ日記 続々	森 友治(撮影・文)
297	じいちゃんさま	梅 佳代
298	浅田家	浅田 政志
299	深読み!日本写真の超名作100	飯沢 耕太郎
300	スモールプラネット	本城 直季(写真)
301	月の名前	高橋 順子、佐藤 秀明(写真)
302	雲の名前、空のふしぎ 天気の観察図鑑	武田 康男(文・写真)
303	PARIS	市橋 織江
304	海中散歩	鍵井 靖章
305	夜空と星の物語	日本星景写真協会、アマナイメージズ
306	夜空と月の物語	日本星景写真協会、ピーピーエス通信社
307	BLUE MOMENT	吉村 和敏

校内読書感想文コンクール概要と総評

図書館長　熊谷　昌彦

２０１４年度校内読書感想文コンクールは、１９６編の応募があり、第一次通過者３１編、その中で１０編が入賞となった。最優秀賞１篇、優秀賞２編、佳作７編である。

２０１２年度までは、読書感想文・エッセイコンクールであった。翌年、２０１３年度は、図書館情報センターのリニューアルのため中止となり、２０１４年度に、校内読書感想文コンクールとして復活した。原則として１年生は全員参加とさせていただき、２年生を含めて１９６編と多くの応募があり、学生の読書感想文の中に、「本を読んで初めて気づかされた」との意見があることを窺い知ることもできた。学生には、自分を振り返る重要な機会となったことをあらためて知って再開をしてよかったと思う。

最優秀賞のD１高津こなつさんの「凍りのくじら」では、「自分の居場所」への疑問がふつふつとわいてくる思春期の感性が伝わってきた。優秀賞のA１岡田仁子さんの「水の柩」は「大切なものは失って初めてわかる」驚きを示してくれた。また、優秀賞のA１谷口清美さんの「五体不満足」は、「ひとりひとりが価値ある生命」であることを気づかされたとの思いを表現している。

佳作の７編の作品も各々、自分の今までの経験になぞらえて、本を読み、自分の生き方についての疑問や気づいた点を示している。読書という行為が、自分の心の中に体験としてはいって、人生の糧となっていることを文面から感じる。来年度も、学生の感性豊かな文章に出会えることを楽しみにしている。

リニューアルした図書館をテーマにした卒業設計

建築学科5年　薩摩 佳美

私は卒業設計として1年間にわたって図書館のサイン計画を行いました。
①館内利用サイン　②注意・禁止サイン　③名称サイン
④書架案内サイン　⑤書架サイン　⑥インデックスサイン
⑦見出しサイン
その他にリニューアルオープンにおいての掲示物と家具の説明パネルを制作しました。

制作したサインは図書館の雰囲気作りの材料となるように考えました。オープンな空間である交流プラザと、個々で静かに利用する空間の閲覧室は色彩の変化を出すようにしました。また本を探す過程でわかりやすくするための新規のサインも考え制作しました。維持更新ができること、判読性のある大きさとすることなどの工夫も行っています。

通常の学校の課題では設計したものを実際に制作する機会はあまり無かったため戸惑いもありましたが何度も時間をかけて検討を重ね決定しました。

無事全部完成することが出来、実際に設置してみて新たに見つかった課題もありますが今後より良いものとなるように更新できるものだと考えています。

学生が設計したものが実際に使われることによって後輩も実際のプロジェクトに取り組む意欲が高まったり図書館に親しみを持ってくれればと思います。

2014年度米子高専文化セミナー報告（第１回～第４回）

２０１４年度の米子高専文化セミナーは、第1回が6月２２日、第2回が8月３１日、第３回が１１月３０日、第４回が１２月２１日のいずれも日曜日に、中海テレビ放送センタービル1階会議室で開催されました。第1回は、電子情報工学科の松原孝史先生による「電気技術史の偉人たち」と題したセミナーが行われ、第2回は、建築学科の熊谷昌彦先生による「幼稚園って何～建築空間から見た考察～」のセミナーが行われました。第3回は、物質工学科の小田耕平先生による「高専４０年随想ログ」と題したセミナーが行われ、第４回は、河添久美名誉教授（機械工学）による「しのび寄るき裂―金属疲労の話」が行われ、いずれも多くの方が来場されました。

松原孝史教授によるセミナー（2014.6.22）

文化セミナーを通じて、米子高専が地域に貢献することができると考えます。来年度も是非ご来場ください。

この冊子は再生紙を使用しています